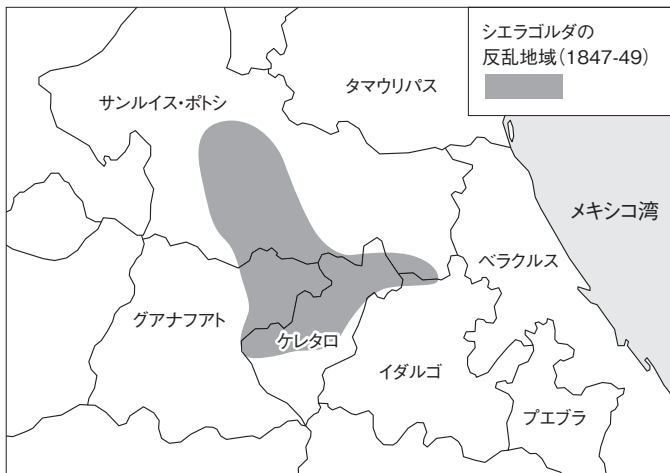


## シエラゴルダの農民反乱（1847－1849）

山 崎 眞 次

### 序

メキシコ中央部のグアナフアト、ケレタロ、サンルイス・ポトシの3州に跨るシエラゴルダ地方では植民地時代からしばしば農民反乱が発生していた。19世紀の独立以降も、反乱が続発し、反乱に参入する農民の数が増え、規模が拡大し、期間も長期化した。農民反乱が発生・継続するには参入者の数が増えることが第1の要因であるが、反乱者が多いだけでは、政府軍に対して勝利を収めることはできない。烏合の衆である農民軍を訓練し、規律を打ち立て、統制の利いた農民軍を再編することが重要である。その役目を担う卓越したリーダーの登場が、農民反乱が持続し、社会的要求を政府に突き付け、地域全体を卷



Leticia Reina (1988), p.277

き込んだ社会的運動に変容させる不可欠な第2の要因である。第3の要因として行政の調整機能が挙げられる。農民が経済的に疲弊し、社会的に疎外された場合、行政がそのような苦境を政治的に解決できないか、座視するとき、反乱が発生し拡大する可能性が高い。農民がアセンダド（大土地所有者）から土地を強奪され、訴訟を起こしても敗訴し、最後の頼みの綱である行政が農民たちの懇願に応えないばかりか、経済権力であるアセンダドに与したとき、救済の道を失った農民たちは最後の手段である暴力的反乱に走るのである。さらにシエラゴルダで反乱が発生・継続した第4の原因として、地域のカウディージョ（領袖）というアクターが登場して、自己の利益拡大を目論み、反乱に介入したことを挙げることができる。

シエラゴルダでは19世紀に零細農民たちが、1820年、1847～49年、1851～53年、1879年と断続的に反乱したが、本稿では主として1847～49年の反乱に焦点をあて反乱発生メカニズムを解明する。この反乱では、搾取され、困窮した農民を救済するためにエレウテリオ・キロスというリーダーが立ち上がり、地域エリートと同盟して政府軍に対して武装蜂起し、当初単なる不平分子の暴動にすぎなかったものを社会的運動にまで昇華したからである。

## 1. 先行研究

19世紀におけるメキシコの農民反乱に関しては、これまで多数の論文や書籍が刊行されている。その中でもユカタン半島で勃発し、およそ50年間継続し20万人の死者を出した激烈な「カスタ戦争」についての研究書が最も多い。シエラゴルダで発生した農民反乱に関しては「カスタ戦争」に比較して、論文数は限定されている。その理由は19世紀に発生した「シエラゴルダの反乱」の反乱回数が4回と頻度が低く、しかも反乱の継続年数も最大3年と短期間であったからである。また、19世紀のシエラゴルダ地域が政治的経済的にメキシコ中央政府にとってそれほど重要な地域ではなかったことも本格的な研究への取り掛かりを遅延させた。しかし、1980年代から徐々に研究者の注目を集め、スペイン

人による征服と植民、修道会による改宗、先住民の言語・慣習の研究から最近では農民反乱に関する研究論文も執筆されるようになった。その理由として、19世紀半ばに勃発した米墨戦争がカスタ戦争や他地域の農民反乱を誘発し、19世紀の農民反乱を総合的見地から俯瞰しようとする研究姿勢が生まれたからである。それまで個々の研究者が19世紀の各地域の農民反乱を個別に研究していた状況において、フリードリヒ・カッツを中心とする研究者たちが、メキシコ全土を視野に入れた網羅的総合的研究書、「Riot, Rebellion and Revolution. Rural Social Conflict in Mexico」(1988)を刊行した意義は大きい<sup>1</sup>。以下、主な先行研究を取り上げる。

ゴメス・カネドは、「シエラゴルダの険峻な地形が植民化と改宗活動を阻害し、自由で奔放な生活を望む者や屈辱や専横から逃れたい人々にとって格好の避難場所となっていたために、政府は19世紀前半に山岳民の自治を根絶しようとした」<sup>2</sup>と述べ、政府の介入を反乱の原因として挙げている。ララ・シスネロスは「植民地時代に先住民農民の間で形成されたカトリックの信徒会は共同体の精神的シンボルであり、経済的基盤でもあった。キロスの反乱は信徒会の消滅とほぼ同時期に発生したことを勘考すれば、反乱の組織化に信徒会が関わっていたと推論できる」<sup>3</sup>と農民が維持してきた信徒会の重要性を説く。ジョン・トゥティノは、「シエラゴルダの農民たちは植民地時代に政治的自治と共有地の自由な利用権を有していたが、植民地時代末期から政府と教会から次第に重い税金を課されるようになり、それらの重税を拒絶し反乱した」<sup>4</sup>と自説を展開する。ラミレス・オルティスは「シエラゴルダの農民は19世紀初頭の10年間、植民地期と同様に政治的自治を維持できたが、政府が野心的な行政的軍事的な管理のメカニズムを実施した同世紀の中葉にエレウテリオ・キロスの反乱が勃発した。だが、シエラゴルダの西部と東部の農民共同体間に緊密な政治的経済的繋がりが存在したわけではなく、ローカルな利益が地域政府の利益と対立し、ローカルなカウディージョの競争心が反乱を助長した」<sup>5</sup>と分析し、地域の自治権介入と地元のカウディージョの反乱への関与を強調した。デラ・ペニャ

は「カウディージョたちが共同して国家から権力を奪おうとしたことが、反乱に拍車をかけ、政治的不安定性を生み出した。その一方で彼らは反乱沈静化の調停者ともなった」<sup>6</sup>と主張し、ラミレス・オルティス同様にカウディージョというアクターの重要性を挙げている。ペレス・ボルデは「キロスの反乱（1847-49）は、ペオンと小作人のアセンダドの搾取に対する不満が爆発して勃発した。主として共有地の木材伐採に課せられた増税に対する住民の怒りが引き金になった」<sup>7</sup>と山岳農民にとって貴重な現金収入である木材に対する課税を反乱の主要な原因として上げている。レティシア・レイナは「米墨戦争中にケタロ、プエブラ、メヒコ各州政府によって戦費調達のために公布された『土地接収法』、木材の裁量権の喪失、物品税、タバコ税、教会税の増額、徴兵制の強化への不満が反乱を生み出した。さらに地域の有力者（カウディージョ）が社会不安に乗じて個人的利益を拡大しようとした」<sup>8</sup>と戦費調達のための増税・徴兵、採集した木材への課税、カウディージョの参戦が反乱を誘発したと分析した。ゴンサレス・マルティネスは「経済的社会的搾取が、植民地時代からキロスの反乱前夜まで継続されたために反乱が勃発した。シエラゴルダの農民の基盤は16世紀から継続して構築され、その過程において“農民階級”を生み出した」<sup>9</sup>と主張する。ジェイムズ・サイファーは「シエラゴルダの1840～1880の反乱について、住民がカウディージョ、州知事、議会、軍事司令官、大統領と交渉したことによって、住民は19世紀半ばにかなりの自治権を獲得した」<sup>10</sup>と分析し、植民地時代から培われた住民の政治的文化力の高さを強調している。ブレシアード・デ・アルバは「ヨーロッパから伝播した社会主義と共産主義がシエラゴルダの先住民に影響を与え、エスニックな闘争が社会秩序の脅威となった」<sup>11</sup>という見解を示した。

先行研究を精査すると、キロスの主要な反乱要因は、アセンダドのペオンと小作人に支払う低賃金や伐採した木材への課税等の搾取と米墨戦争続行のための課税と言える。キロスは米墨戦争に参加したが、途中で脱走している。対米戦の敗戦が濃厚になると、メキシコ軍からの脱走兵が相次ぎ、シエラゴルダに

も多くの脱走兵が避難し、これらの転入者が地域の安定と秩序を損なった。元兵士だけに戦闘に長け、州政府軍と連邦軍を悩ませた。一方、植民地時代から政治的に比較的自由的な自治権を維持していた地域農民に独立以降、州政府と連邦政府が強圧的支配を高めたことを反乱の発生原因とする研究者もいる。また、シエラゴルダの地域的カウディージョ（地方エリート）の反乱への介入が状況を複雑化したと、カウディージョというアクターの重要性を強調する研究者もいる。宗教的理由や社会主義の影響を反乱発生の要因に挙げる識者もいることを考えれば、シエラゴルダの反乱原因を一言で表現することは難しいが、筆者は政府の調停能力の低下を反乱拡大の要因として提示する。

## 2. 歴史的背景（征服と改宗）

エルナン・コルテスが1521年にアステカ王朝を征服後、スペイン人征服者は首都のテノチティトラン（現在のメキシコ市）からメキシコ各地やグアテマラの征服と植民へ繰り出し、植民地を拡大していった。テノチティトランから250キロほど北にあるシエラゴルダの征服と植民に向かったスペイン人は、チチメカ族（北方の蛮族）の一部を征服し、1522年、コルテスによってタムイン、オキシティパ、ハルパンにエンコミエンダ<sup>12</sup>が付与され、植民事業は民間人に任された。シエラゴルダの採集狩猟民族チチメカ族は遊動民であり、きわめて好戦的であった<sup>13</sup>。スペイン人はそのような非文明的なチチメカを馴化するために、すでに征服され改宗したナワ族、オトミ族、トラスカラ族を送りこみ、チチメカの定住化と文明化に取り組ませた<sup>14</sup>。

最初の布教村は、アウグスティヌス会が建設したハルパンとドミニコ会が開いたアウアカトランとエスカネラである。シエラゴルダの先住民インディオは、パメス、シンペセス、ホナセスの3部族で言語体系からみるとオトミ系とオトマンゲ系に分類される。彼らは未開民族の総称としてチチメカと呼ばれていた。パメスとシンペセスはアシエンダを訪れスペイン人の文化に関心を示したが、ホナセスは山地に籠り、度々蜂起し、スペイン人集落を攻撃した。1569

年の反乱にドン・ルイス・デ・カルバハルが対応し、1578年、ハルパンに教会と修道院を持つ砦を建設した。シエラゴルダへの入り口は3か所あり、東はタンピコーシリトラ、南はシマパンーカデレイタ、北はリオ・ベルデである<sup>15</sup>。1583年にフランシスコ会が入山し、教区村を建設したが、1609年の反乱で彼らの改宗活動は水泡に帰した。フランシスコ会がパメスの布教村として建設したシリアパは放棄されアウグスティヌス会が引き継いだ。リオ・ベルデでは、インディオの頑強な抵抗に遭遇した。アントニオ・デ・アギラル師はシマパンの鉞夫に敵対するチチメカを平定・馴化したが、1633年、彼らは従来の野蛮な風習に戻った<sup>16</sup>。

1636年、軍司令官ヘロニモ・デ・ラブラ1世はホナセスの平定を開始し、放棄されていたエスカネラ、カデレイタ、シマパンの集落を再建した。フランシスコ会はラブラ1世の駐留軍の監視下、修道院を建設したので、シエラゴルダの布教活動が進展した。ラブラ1世は地域の軍事的・精神的征服に貢献したことによって、副王のパレデス伯爵から「インディオの庇護者」の称号を授与された<sup>17</sup>。1650年、シエラゴルダの南部ではエスカネラからカデレイタに行政の中心が移管され、シエラゴルダ地方は18世紀までオキシティバ、シチュ、メツティトラン、カデレイタを行政中核地として統治された<sup>18</sup>。1703年、ホナセスは修道僧に管理された布教村での生活に耐えられず自由を求めて反乱したので、フランシスコ・デ・サララ・イ・アルセに討伐令が出された。サララはヘロニモ・デ・ラブラ2世を騎兵隊長に任命した。ラブラ2世はインディオの隊長、ミゲル・ピンベエとアロンソ・ウリアンデエを説得し、彼らの妻を人質とさせたが、その後彼女たちを贈答品とともに返還し、その他の族長も懐柔したので、インディオたちは降伏の約束をした<sup>19</sup>。これらの功績によってラブラは全シエラゴルダのチチメカ族の司令官兼保護者に任命された。ラブラはその後、土地を付与されアセンダドとなり、鉞山も所有し、地域の軍事、経済、政治を支配する有力者となった。ラブラは恭順した200人のホナセスの洗礼をマコニで実施した。アウグスティヌス会士のフェリペ・デ・ヘスス・メドラノは全インデ

イオを教会の台帳に記載し食糧を与えた。さらにマコニ・アシエンダの土地を分配した。その後、フランシスコ会が教区村を建設し、ホナセスの改宗に取り組んだ。ラス・アフンタス・デ・トリマンは中心的教区村で、その後、砦化され、サンタ・テレサ・デ・ヘスス・デ・バレロ・マコニに名称変更された。ラブラはインディオの人口調査を行い、6か所にインディオ自治区を建設したので、この地域の治安は安定した<sup>20</sup>。ラブラー族は、インディオの平定と教区村建設の功勞によってシエラゴルダにおいて政治、経済、軍事の有力者となった好例である。

ラブラ2世の後、シエラゴルダのインディオを平定するのは、スペインのサントandel出身のホセ・デ・エスカンドンである。1740年に軍事司令官に任命されたエスカンドンは抵抗を続けるインディオに過酷な戦闘をしかけ、徐々に平定地を拡大し、1755年、24村を建設し、3,443人のインディオを集住させ、教区村の統治と防備に21名の士官、1名の下士官、1名の旗手、1名の鼓手、12名の軍曹、176名の兵卒を配備した。フェルナンド6世は1749年、エスカンドンの輝かしい軍功に対してシエラゴルダ伯爵の爵位を付与した<sup>21</sup>。確かにエスカンドンの軍事力によって地域は平定され、社会的不安は排除されたが、教区村でのインディオは奴隸的狀態におかれたので、脱走が頻発した。修道会がエスカンドンのインディオへの虐待を副王に報告すると、エスカンドンは副王に修道会は教区税をインディオに課すばかりで、布教を等閑にしていると非難した。軍人と修道会はスペイン王室の領土拡大のために軍事的征服と精神的征服を協力して行う不可欠なパートナーであったが、インディオの処遇に関して、軍人と修道会が衝突することも度々あった。

1743年2月、副王はシエラゴルダの布教活動にアウグスティヌス会に代えて、フランシスコ会を派遣した。その一人にフピペロ・セラがいた。セラは80人のパメスを教区村に集住させたが、教区村を拒むホナセスは再び反乱した。フピペロ・セラ一行が1750年半ば到着以降、教区村は豊作に恵まれ、飢餓から救われた。フピペロ・セラがハルパンを中心に行った布教活動期はシエラゴル



ダ地方の布教黄金時代であった<sup>22</sup>。

1767年、スペイン王室は強大な組織力と経済力を有するイエズス会を新大陸から追放した。シエラゴルダではイエズス会が残した教区の維持と発展がフランシスコ会に託された<sup>23</sup>。その後、ロレンサナ大司教は1770年、フランシスコ会が建設・運営してきた修道会の教区村をメキシコ司教区の管轄に移した。この管轄移管に対してインディオの間に不安が広がった。インディオは修道士に代わる在俗司祭の派遣に抗議した。在俗司祭によるキリスト教の押しつけでパメスは内部的自治権を失い、また原始的宗教からの急速な暴力的改宗に戸惑った。在俗司祭にランダ、ティラコ、ハルバン、タンコヨル、コンカの5教区が与えられたが、プレスビテリアン派は布教に失敗し、インディオたちは山岳部に逃亡した。修道会はインディオに対して軽微な課税しかなかったが、プレスビテリアン派は司祭用の10分の1税を農民に厳しく要求したからである。18世紀末、脱走が相次ぎ、教区村を維持できなかった。1794年サンファン・パウティスタ・デ・シチュのインディオはスペイン軍の駐留に不満を抱き、反乱した。直接の原因は、シチュの司祭が聖週間の運営をスペイン人グループに委ねたからである<sup>24</sup>。この信徒会はインディオに帰属していた。スペイン人は勅令によりインディオ集落には居住できず、インディオの習慣を尊重しなければならなかったのである。

一方、為政者はアセンダド、軍人、聖職者による先住民農民に対する搾取を看過していたわけではない。知事サルバドル・デ・サンチャゴはアセンダドの越権行為への不満を副王に報告した。知事の報告書によれば、サリトレとバルミジャスのアセンダドはインディオの伝統的伐採権や放牧権を禁止し、山林で捕らえたインディオを鞭打った。そして捕えた迷い牛をインディオに高値で買い戻させた。インディオはアセンダドとともに職権乱用するファン・アントニオ・デル・カステージョ・イ・ジャタ司令官に抗議した。新知事ハシント・カエタノはインディオの要求を聞き入れ、インディオに有利な決定を下した。カエタノのようにインディオに対するスペイン人アセンダドの横暴な振る舞い



に心を痛め、インディオの要求を聞き入れ、アセンダドとインディオ間の調停を行った為政者も少なからず存在した<sup>25</sup>。

1803年になってもインディオの状況は改善しなかった。司祭が義務であるミサを行わなかったことも反乱の原因であった。司祭が集落に行くのはインディオの収穫物から教会税を徴収するときだけであった。1806年、シチュの住民はアセンダドが建設したマゲイの柵を壊し、耕作地として占拠した。インディオの依頼人、ホアキン・ベレス・ガビランは52年前からシチュの住民はアセンダドと土地の所有権に関して訴訟しており、2回有利な判決を得たが、遅延とアセンダドの策略によって土地所有権を付与されていなかった。ガビランはシチュ住民の土地占拠を弁護した。近隣のアセンダドがシチュの住民の木材採取と家畜の放牧を禁止したからである<sup>26</sup>。植民地政府はアセンダドに土地の返還を命じ、知事ペドロ・デル・トロの逮捕を命じた<sup>27</sup>。

1810年に独立戦争が勃発すると、シエラゴルダも両軍の戦闘の舞台となった。1816年、独立軍はハルバンに立て籠もり、王党軍に抵抗した。その後メキシコは1821年にスペインから独立を達成したが、サンルイス・ポトシ州のシエラゴルダ地域では、1827年、州知事のディアス・デ・レオンが、連邦政府がカリフォルニア基金用に所有していた2つのアシエンダの譲渡と未耕地の借地化によって先鋭化した農地問題を解決しようとした。だが、連邦政府は負債返済のためアシエンダを売却し、アセンダドも借地化に反対したためにレオンの意図は頓挫し、翌年連邦政府は知事を更迭した<sup>28</sup>。

植民地時代にシエラゴルダでも鉱物資源が発見され、スペイン人の山師が徘徊したが、シエラゴルダの鉱山で採掘される銀や鉛の生産高は、グアナフアトやサカテカスの大鉱脈に比べれば少量で、鉱山町の発展はきわめて限定的で、集落の数も少なかった。そのためにこの地方は首都に比較的近いにも関わらず征服前の状態、つまり、採集狩猟民族が改宗しないまま、また文明化されないまま取り残された地域となった。16世紀末期にアウグスチヌス会が布教を試みたが、ほとんど成果を上げることはできず、この放置状態は17世紀も続き、本

格的に軍の力による征服と主にフランシスコ会による改宗が行われるようになるのは、18世紀に入ってからである。そのためシエラゴルダ地方では植民されることなく多くの農民が伝統的社会を保持できたのである。この山岳地帯は険峻な地形が植民化と改宗活動を阻害し、他地域から孤立していたので、自由で開放的な生活を望み、官憲からの追跡から逃れたい人々にとって格好の避難場所となったのである<sup>29</sup>。

保守的新闻エル・ユニベルサルはスペインの植民地時代の先住民支配に関して次のように述べている。「植民地時代、インディオは不満もなく彼らの土地で平安に暮らした。彼らが負担できる以上の課税はしなかった。スペイン人たちは物理的力だけではなく精神的力を基礎にした効率的支配システムを創造した。布教僧たちは重要な役割を果たした。保守派によれば、平等の原理によってこのシステムは1810年に廃止された。インディオに抑圧的になり、徴兵を行い、土地を奪い、新しく苦痛となる負荷を強制した。この文脈において保守派によれば、反乱の勃発は驚くに当たらない」<sup>30</sup>。保守的新闻エル・ユニベルサル紙の主張を鵜呑みにはできないが、植民地時代のスペイン統治の悪弊を強調する自由主義派の意見のみを受け入れることも公平とは言えない。スペイン人為政者の中にも善政を施した者も少なくなかったということである。

### 3. エレウテリオ・キロスの反乱

メキシコの他地域で勃発した反乱の主要な原因は、アセンダドが農民共同体の土地を浸食し、土地の所有権を奪ったばかりか、伝統的共同生活の基盤を脅かしたからである。だがシエラゴルダにはスペイン人進出以前にはほとんど定住先住民集落は存在しなかった。先住民のチチメカ族（非文明的北方遊動民の総称）の定住化に貢献したのは、すでに文明化されたオトミ族やナワ族であった。スペイン人によって送りこまれた西欧化した部族はシエラゴルダの未開地に入植し、農業、牧畜に依拠する定住生活をチチメカに教えた。チチメカの中でもパメス族とシンペセス族はカトリックに改宗し、定住農耕に馴化したが、

ホナセス族は定住生活に適応できず、再三、教区村から逃亡し、地域の秩序を乱し治安を悪化させた。チチメカは元来遊動民であったために植民化以降も土地所有意識は希薄であったが、18世紀後半以降に農民反乱が増えたのは、農民共同体の権利として認められていた集落の共有地である山林、牧草地、湧水地の利用がアセンダドによって制限または禁止されたからである。本来これらの共有地は農民共同体に帰属し、その用益権は植民地政府も先住民農民の権利として認めていた。シエラゴルダ一帯は山林に覆われ、木材を豊富に産出した。共有地の木材は農民にとって自炊用や建築用、あるいは市場で販売する貴重な現金収入であった。木材代金で土地の賃料を払い、農地を確保し、農産物を栽培した。山林は生活の基盤であり、彼らの生活維持に不可欠であった。しかし、18世紀半ば、自由な山林開発が許可され、本来は農民共同体に属する山林の開発に政府とアセンダドが乗り出し、山林から伐採される薪や木材の代金を要求し始めた<sup>31</sup>。19世紀の独立以降は山林における木材伐採に対する管理がさらに厳しくなり、農民は木材を自由に伐採し、自家用利用や販売が困難になった。ユカタン半島のカスタ戦争、首都圏のフリオ・ロベスの反乱、西部のウイチョル族とコラ族を従えたマヌエル・ロサダの反乱、北部のヤキ族の反乱とは異なり、シエラゴルダの反乱では土地の返還要求は反乱の主要な原因ではなかったと、言える。

二番目の反乱原因は、不動産接収法と徴兵である。1844年、リオ・グランデとシチュの農民はテキサス戦用の徴兵と徴税に抗議して反乱した。対米国戦の資金として教会や先住民の土地を接収し売買する法が公布されたからである。1847年1月の法令でケレタロ政府には不動産を接収・売買する権能が付与された<sup>32</sup>。州政府は米国と戦う軍隊を維持するために資金が必要であった。ベラクルスのワステカ地方のオトミ、ナワ、トトナカは共同して共和国政府に反対の声を上げた。蜂起が徐々に山岳部全体に拡大した。1848年6月4日、サン・ホセ・デ・ロス・アモレスでトマス・メヒア<sup>33</sup>を中心とする反乱者の「政治的計画」が署名され反政府運動が始まった<sup>34</sup>。7月13日、イダルゴ州北部のインディオ

から火の手が上がり、他のグループと合流した。プエブラのウアチナンゴ、サンルイス・ポトシのタマスンチャレ、イダルゴのウエフットラにも飛び火した。征服以前から農村共同体を基盤とする社会を築いていたオトミ族、ナワ族、トトナカ族は土地の回復のために戦った。1848年8月13日、反乱の拡大を危惧した大統領のホアキン・エレラは反乱者に恩赦を与えた<sup>35</sup>。

エレウテリオ・キロスは、ロス・アモレスの反政府運動に参加した。キロスは他の19世紀の盗賊同様に社会的不正義の産物であるが、徴兵、アシエンダと軍部の横暴という状況がキロスを後に社会運動のリーダーに変身させる。アセンダドの中には米国の侵略を絶好の機会と捉え、衰退からの救済の可能性と見なした。キロスとアセンダドのチャイレ家は共闘した。チャイレ家の60名の男たちはドン・ミゲル・チャイレの命令で徴兵された予備兵であり、囚人も取り込み、政府軍から奪い取った銃で武装した。ドン・ミゲルと息子たちは米国の味方をするために反乱した。米国を援助し、反乱を支持するための回状が出回った。政府に財産を差し押さえられ、衰退していたチャイレ家には失うものは何もなく、共和国政府と対峙して米軍やインディオ農民との同盟に活路を見出した<sup>36</sup>。キロスは米国支援のための志願兵を募り、政府軍の捕虜も加えるべしという声明を出したが、その一方でメキシコ市の連邦政府に米兵との戦闘に奉仕するという使者を派遣している<sup>37</sup>。この矛盾した行動に関して、トマス・カルビジョは、キロスのような無産階級者には愛国心など元来備わっていなかったし、また19世紀中葉のメキシコ国民全体にも祖国愛が欠如し、それ故に米国に大敗したと結論づけている<sup>38</sup>。政府はキロスの対米戦協力の提案を拒絶した。この時からキロスは地域の支配者階級に対して窃盗、放火、略奪を行う盗賊団の首領になり、ビジャ大佐の殺害、アルテアガ、パルミジャス、ノガリトなどの町長の殺害に関与した<sup>39</sup>。

エレウテリオ・キロスは1825年、シチュカその周辺で生まれたと言われている。背が高く頑丈な体格で、目は小さいが、鋭い眼光を放っていた。ほとんど読み書きはできなかったが、戦闘では勇猛果敢で天賦の軍才が備わっていた。

タパンコ・アシエンダで働いているとき、雇用主と衝突して足枷をつけられたが、抵抗し、逃亡した。米墨戦争期、グアナファト予備隊の第4大隊に入隊し米国と闘うために北部に向かったが、アングストゥーラの戦い（1847年2月22～23日）で脱走し、シエラゴルダに戻った。その後ミゲル・チャイレの家で雑用係として働き、二人の息子フランシスコとグアダルーベと懇意になった<sup>40</sup>。1847年9月1日、反目するシチュの市長に囚われたフランシスコの奪回待ち伏作戦を成功させ、ミゲルの信任を得た。ミゲル・チャイレとは代父の関係となり、地方寡頭勢力との関係を強化し、農民軍の中で昇進した。ゲレロ・タルキンによれば、「キロスはパトロンの意向をくみ取り農民を動員しつつ、農民の利益を代弁して両者の関係を取り結ぶという指導者としての素質が生来備わっていた」<sup>41</sup>。チャイレ一族は売上税、教会税、タバコ税、徴兵の強制に反対して武装蜂起したものの、1847年末に恩赦を受け入れ反乱軍から離脱した。だがキロスは脱走兵ゆえに恩赦を付与されなかった。キロスはその後農民反乱軍をまとめ、1848年8月のトマス・メヒアの背信後は名実ともに反乱軍の総司令官となった。キロスたちは、物品税、教会税、たばこ税、徴兵の餌食となっていた人々の共感と支持を得た。キロスは、ベオンや小作人としての経験でアシエンダの労働者やランチョの賃金労働者の状況を熟知していた。彼らに労働時間の削減、賃料の正常化、土地分配システムの廃止や自作農の創設を提案した<sup>42</sup>。農民軍を率いる過程で義賊が社会的運動家に変容した。

一方、連邦軍はサンルイス・デ・ラパスとグアナファト市に駐留するのみで、またリオ・ベルデの国家警察隊も主要都市を守るだけで精一杯で混乱した状況を統制できなかった<sup>43</sup>。1847年9月、米軍がメキシコ市を占領したので、共和国政府はケレタロ市に移り、戦闘を継続したが、1848年2月グアダルーベ・イダルゴと和平条約を結び米墨戦争は終結した。だが連邦政府が締結した和平条約を認めない地方政府やカウディージョがいた。サンルイス・ポトシの知事は条約に署名した連邦政府を承認しなかった。反政府運動を展開する元大統領マリアノ・パレデス将軍がシエラゴルダに現れ、1848年10月15日、シチュでエレウ

テリオ・キロスと連名の声明文を公表した。声明文は12条から構成され、グアダループ・イダルゴ条約の撤廃、カトリックへの帰依、領土の割譲と接収への反対、連邦制の維持、真の愛国者への顕彰、任命される役人への敬意、無産者の搾取禁止、私有権の尊重、司令官同士の連絡の禁止が主な内容である。この声明は離反軍部と山岳民との同盟であったが、長続きはしなかった。パレデスは農民軍を統率するのは不可能だと悟り、キロス農民軍と袂を分かった。一方、キロスは1500名の兵を率いてゲリラ戦法で抵抗を続けた。だが、反乱軍は1849年1月と2月に大敗し、戦局は不利に展開した。そのとき政府軍の保守派の将校レオナルド・マルケスが大統領エレラの違法性を訴え、サンタアナの復権を要求して政府軍に対して反旗を翻した。マルケスの反乱に他の将校も同調したために政府軍の統率が乱れた。その隙に乗じて農民軍はリオ・ベルデ近郊のエル・ハバリで巧みにゲリラ戦法を用い連邦軍を破った。近寄りがたい山岳地帯を移動し、攻撃した。敵兵を巧みに山岳部に誘い込み、混乱させ、奇襲後、山地に姿を消した<sup>44</sup>。こうしてリオ・ベルデに進軍した。このときリオ・ベルデの有力者マヌエル・ベラステギがキロス軍に合流した<sup>45</sup>。マヌエルはリオ・ベルデの長官を停職処分にされていたので、キロスと連帯することで州政府に圧力をかけ失った身分と名誉を取り戻そうとした。知識階級出身の行政官であったマヌエル・ベラステギは単なる農民の武装勢力にすぎなかった集団に反乱の大義を伝授した。ベラステギの参加によって農民反乱は社会的運動の様相を帯び、「農民再生軍」と名乗るようになった。日々勢力を増す反乱軍の勢いを懸念したグアナフアト政府は恩赦を提示したが、反乱軍は応じず、リオ・ベルデを占領した。農民再生軍は1849年3月14日、「政治的で極めて社会的計画」を宣言した。この「計画」については次章で取り上げる。この動きに対してケレタロ、グアナフアト、サンルイス・ポトシ政府は協定を結び、シエラゴルダの平定を図った。政府は1849年4月11日、生活基盤を奪われた人々の貧困と不満の原因を改善するために特例法を発令し、今回は脱走兵を問わず恩赦の声明を出し、キロスをシチュの国家警察隊の司令官に任命することを公表した。提案

の内容は、キロスに土地購入用に1万ペソ付与、各幹部に5千ペソ、ベラステギへの補償、共同体の土地分配であった。1849年5月15日、両者は合意に達しノリア・デ・チャルカス協定が結ばれた<sup>46</sup>。キロスに3千ペソを与え、武器引き渡し者用に6千ペソが渡されることになったが、最終的に和平交渉は不首尾に終わった。和平協定の不調を受け、連邦軍司令官アナスタシオ・ブスタマンテが出動し、1849年、トマス・メヒアを討伐隊長に任命した。反乱軍の意図はサンルイス・ポトシまで到達することであったが、戦線が拡大しすぎ、敗北を重ねた。反乱軍が故郷の山岳地帯から離れるにつれ、戦死するもの、逮捕されるもの、恩赦をうけるもので、軍事的に弱体化した。メヒアはキロスを1849年10月3日にセロ・デ・ドクトルで捕らえ、12月6日、銃殺した。後日談になるが、メヒアは保守派を支持したために自由主義派の大統領コモンフォルトから追跡され、1857年、捕縛された。だがフランス軍が進駐してくると、フランス軍の将軍となり、シエラゴルダでファレス共和国軍と戦闘を続け1860年、リオ・ベルデを制圧し、ハルパンに軍司令部を置いた。フランス軍はその後、徐々に撤退し、メヒアは1867年、ロサス・ランダ将軍によって捕えられ、マキシミリアン皇帝とともに銃殺された。

#### 4. 「政治的で極めて社会的計画」

エレウテリオ・キロスは1849年3月14日、リオ・ベルデで反乱の大義を掲げる「政治的で極めて社会的計画」を公表した。「政治的で極めて社会的計画」は22条と4条の付帯条項から成る。以下、各条を列記する。

第1条：再生軍は1824年の憲法と1847年の「不動産接収法廃止」を承認する。

第2条：また合法的に構成された国民的政府とそれを形成する官僚を承認する。

第3条：サンルイス・ポトシ州の秩序は、1848年1月以前の状態に戻る。それゆえ、合法的に選出された公職を暴力的に解任されたドン・ラモン・アダメとドン・マリアノ・アビレスと当時の公務員は復職する。

第4条：常備軍（再生軍）は本日から1カ月以内に武装解除される。共和国軍



は国家警察隊によって構成される<sup>47</sup>。

第5条：国会議員は国家に貢献した司令官、将校、再生軍に報償を与える。彼らは報償を決定するために設置される顕彰会議によって評価される。

第6条：司祭は共和国の福利の要求に従い、改心し、倫理感を高めるべし。彼らの手から恐るべき政治的権力を剥奪する。彼らは膨大な収入を取得してきたが、公共的自由を損ない、ほとんど大衆を啓蒙しなかった。

第7条：共和国ではローマカトリック教以外の信仰は許されない。

第8条：国会議員はその特権を失い、委員会の判断に従うこと。

第9条：メキシコ人の間に存在する恒常的な公務員志望をなくすため、あらゆる公務員選択の決定は評議会の合意事項とする。

第10条：国会は真に正義と知見の法を公布するうえであらゆる選択肢を考慮し、土地なし困窮者階級の状況が改善されるように土地の分配を調整する。

第11条：1500人以上を雇用するアシエンダとランチョを集落とする。国会議員は農民の繁栄に不可欠な要素を整理し、土地の分配と地主に対する土地接収に関する手段と制限を模索すべきである。

第12条：アシエンダとランチョの小作人は節度ある賃料で耕作し、地主は自身が未耕作の土地を彼らに分配する義務がある。

第13条：小作人は家賃や共有地での家畜の放牧料、家族が消費する薪、マゲイ、トゥーナや果実の代金を払う必要はない。

第14条：いかなる労働も正当な賃金が支払われない限り、小作人は労働に従事する必要はない。

第15条：アシエンダに居住するペオンと賃金労働者に対して満足すべき良質な労働条件と常識的賃金を与えるべきである。

第16条：武器をもってこの「政治的で極めて社会的計画」を守り通したシエラゴルダの住民は、良き労働に対する正当な分配の観点からあらゆる直接税、間接税、教会税を免除される。

第17条：シエラゴルダの住民は、前条によって付与された免税を確実に享受す

るための場所として、再生軍の領袖であるドン・エレウテリオ・キロスの命令に奉仕したことにより事務所を連邦政府から付与される。

第18条：前述のドン・エレウテリオ・キロスは連邦政府から国軍の大佐の職務を遂行する事務所を獲得する。彼には月額100ペソの年金が付与され、それはグアナフアトの軍事委員会から生涯付与される。たとえ財源が乏しくても同額の年金が付与され、その場合は別の公共基金から資金を調達する。

第19条：キロス氏の幹部は生涯月額70ペソの年金を付与され、領袖と同様の規定により支払われる。

第20条：将校は月額30ペソを享受し、キロス氏とまったく同様の方法によって支払われる。

第21条：軍曹以下の階級は政府に阻害されることなく完全な自由を享受し、この「計画」がプロレタリアートに付与した特権と免税権を持つ。

第22条：連邦政府がこの「計画」が要求する義務を履行すれば、シエラゴルダの住民はすべて平和的に撤退し帰宅し、弾薬をキロス氏に引き渡す。彼は上層部が任命する委員会に弾薬を渡す。それをもってして現在の革命は終了する。

リオ・ベルデ、1849年3月14日、エレウテリオ・キロス

別途、4条の付帯条項あり：1. ペドロ・サマノをサン・ルイス・ポトシ州の暫定知事に任命する。2. サンタアナの政権復帰に反対する。3. 追放者の帰宅を許可する。4. 税関を廃止する<sup>48</sup>。

この「政治的で極めて社会的計画」はサンルイス・ポトシ州東部のアセンダド、マヌエル・ベラステギによって作成された<sup>49</sup>。マヌエル・ベラステギとホセ・マリア・ベラステギ兄弟はサンディエゴとエル・ハバリのアシエンダを所有し、地域の有力者であった。兄弟は州知事のラモン・アダメ、副知事のマリアノ・アビラと連帯し州東部を政治的に支配していた。このグループは連邦政府が締結した米国との和平条約締結に反対し、シチュのチャイレ族やグアナフアト州知事のロレンソ・アレジャノと連携した。米軍にメキシコ市を追われ、臨時政府をケレタロ市に設置した連邦政府は米国の和平交渉担当のニコラス・

トリストと交渉を開始したが、ミチョアカン、ハリスコ、アグアスカリエンテス、サカテカス、サンルイス・ポトシの各州は連邦政府の対米交渉を支持しなかった。彼らにとって米国との和平交渉は祖国に対する裏切りであった。中西部の州は独自の方針に基づいて戦争の継続を主張した。ところがアダメとアビラの戦争続行計画は州議会で反対され、アマドル将軍によって逮捕された。そこで、ベラステギ兄弟はリオ・ベルデ県の長官として権力を維持し、勢力挽回のためにシチュとサンルイス・デラ・パスで勃発した農民反乱に期待し、キロスとの連携を図った<sup>50</sup>。マヌエル・ベラステギは農民軍を率いるキロスの統率力に目をつけ、この農民リーダーに取り入り、懐刀となったのである。学識あるベラステギは軍才のあるキロスの右腕として活躍し、「政治的で極めて社会的計画」が生まれた<sup>51</sup>。

「計画」を分析すると、政治的要求、農民の待遇改善、再生軍の幹部と兵士の身分保証という3点が大きな柱となっている。政治的要求は独立直後に制定された1824年のメキシコ連邦共和国憲法が下敷きとなっている。同憲法は自由主義派が主張した三権分立主義を掲げているものの、保守派が要求したカトリックの国教化も同時に謳われ、そのため自由主義的主張と保守的主張が併記されている。「計画」には政治的社会的現状を維持しようとする傾向が見られるが、反政府的要求が盛り込まれ、自由主義的精神が発露している。具体的には、①穏健な自由主義者によって指導される中央政府の存在を承認、②職業軍人から構成される連邦軍を廃止し民間人より構成される国家警察隊によって代替する、③キロス軍を国家警察隊に編入し、年金を含めた給与の確保、④モラルの低下した教会の改革、⑤アシエンダの収奪の軽減とペオンと小作人の労働条件の改善、⑥ベラステギ派の復帰が主な主張である。

メキシコの他地域の農民反乱はアシエンダの廃止とアセンダドの糾弾を掲げているが、「計画」の11条、12条、15条はアシエンダの廃止を規定していない。アセンダドもキロスの農民反乱軍と同盟して、連邦・州政府軍と戦ったからである。アシエンダの廃止が「計画」に盛り込まれなかったもう一つの理由は、

農民の生活が基本的にアシエンダに依存していたからである。アシエンダ内のペオンとアシエンダから土地を賃借している小作人はともにアシエンダという収奪的土地所有制度を否定しなかった。他地域の農民が植民地時代から伝統的共有地を保有していた先住民が中心となっていたのに比べ、シエラゴルダの農民は先住民というエスニック性が乏しく、そのため共同体の土地がそれほど存在せず、土地保有権を主張できる環境が失われていた。「計画」は土地問題に光を当てたが、植民地時代から農民を搾取してきたアセンダを攻撃の標的にしていない点が大きな特徴と言える。「計画」は地方のエリートと困窮した農民の妥協の産物である。とは言っても、無産階級が長年耐え忍んできた苦境を暴力的手段で訴え、自分たちの大義を突き付け、社会的正義を要求したことは社会運動として評価できる。彼らの要求が正当性を持つことは、州政府が収奪された農民の状況を認識し、譲歩したことからも明らかである。

また州政府は、キロスの反乱を窃盗、傷害、殺人を主とする盗賊団の仕業と見なし、白人対インディオというエスニックな闘争であるという二元論を否定している<sup>52</sup>。エスニック性を否定したのは、植民地時代から搾取されてきた先住民農民の反乱の大義を認めることになり、白人が支配的な州政府と経済権力のアシエンダの収奪が白日のもとに晒されるからである。シエラゴルダ地方の先住民は植民地時代以降、スペイン人との混血化が進んだ。異種混交的社会においては、純粋な“インディオ”という人種カテゴリーはほとんど存在しなかったという意味において州政府の主張は正しい。ユカタン半島のマヤ先住民が白人エリートに戦いを挑んだカスタ戦争とは明白に異なる<sup>53</sup>。

## 結語

アステカ文明やマヤ文明が繁栄した地域はメソアメリカ文明に属する。シエラゴルダはその文明圏の北辺に位置する。この北部辺境地帯の居住者は大半が定住農民ではなく、採集狩猟を経済基盤とする遊動民たちであった。スペイン人の征服・植民以降に漸次定住生活に移行したが、農業経験がほとんどないた

めに土地の所有観念は希薄であった。メキシコの中中部や南部の先住民はスペイン人進出以前から共同体を形成し、共同体によって割り当てられた土地を耕作していたので、侵略者による農地の強奪に真っ向から反対し、時には武力闘争も辞さなかった。だが、シエラゴルダの住人は土地所有という意識は低く、平定された後は、新たに入植したオトミ族やナワ族等の先住民農民に感化され、狭い土地を耕作する小規模自給自足的な農民となった。その一方で17世紀以降、次第に拡大するアシエンダで労働に従事するペオン（アシエンダ内労働者）となる者が増加した。過疎地であるシエラゴルダでは山林は誰のものでもなかったが、私有地の拡大が先住民の自然資源の使用権の喪失を招いた。アセンダドは次第に山林使用の代金を農民に要求ようになった。それが、19世紀まで継続する山岳民の闘争の原因の一つである。炭焼き、木材伐採者、木こりによって山林の活用は不可欠であった。彼らが反乱の主役で、その後ペオン、小作人、メディエロ（収穫の半分を地主に納入する農民）、脱走兵、盗賊が加わった。彼らには先住民共同体を基盤とするエスニック性が希薄で内部的紐帯は強いものではなく、分裂の危険性を内包していた。

この農民の反乱は、地域での経済的・政治的権力を拡大しようとするエリートに戦略的道具として利用された。連邦・州権力に対する地方勢力の闘争は、米国の侵略を自らの勢力拡大の絶好の機会と捉えて、下層農民の労働条件の改善を約束し、ペオンを武装化した。キロスが率いる反乱が一過性のものではなく、1年以上も継続した原因の一つは、シエラゴルダ地域の有力なエリートたちが反乱を利用して、自己の利益を拡大しようとしたからである。領袖たちは時には連合し、時には反目した。また、政府軍と手を組むこともあれば、政府軍と敵対することもあった。要するに機を見るに敏で、己の利益を最優先に考える日和見主義者たちであった。彼らの無定見な動きが地域の混乱に拍車をかけた。ミゲル・チャイレ、トマス・メヒア、マヌエル・ベラスategiのようなキロスの反乱に乗じて己の政治的権力と経済的権益を拡大しようとした領袖がもし反乱に参加していなければ、キロス軍は反乱の初期段階で政府軍によって鎮圧

されていた可能性が高い。農民再生軍と政府軍の二つのアクター間の争いに第三者である地域の領袖たちが介入したために、反乱の構図が複雑化し、地域の混迷が深まり、反乱が長期化した。農民反乱軍は状況を改善できるという期待から、寡頭勢力（アセンダド、軍人）グループと一時的に同盟し、彼らを支持する社会的勢力を形成した。社会的不正義に苦しんだキロス是非合法的手段に訴え、盗賊となったが、彼の活動は徐々に社会性を帯び、最終的に大衆運動のリーダーとなった。この反乱はブラボ・ウガルテが主張するような「カスタ戦争のシエラゴルダ版」ではなかったと言える<sup>54</sup>。19世紀のシエラゴルダには先住民共同体はすでにほとんど存在しなかったが故に、ユカタン半島のマヤ族のようなエスニック的闘争ではなかったのである。

シエラゴルダの農民反乱の発生メカニズムに関して述べてきたが、最後に「政府の調停能力の低下が反乱を誘発した」という筆者の仮説について触れておく。植民地時代には先住民農民はスペイン王室の臣下として家父長的な庇護を受けてきた。アセンダドが違法に先住民農民の土地を強奪した場合は、先住民政府は植民地政府にアセンダドの不正を直訴し、あるいは裁判所に訴状を提出し、アセンダドの違法性を告発した。告発を受けた政府は常にはなかったが、アセンダドに警告し、農民共同体に違法に奪った土地の返還を要求することもあった。また裁判所が農民側に有利な判決を下す場合もあった。だが、スペインから独立して樹立されたメキシコ政府は先住民を保護すべき特別な存在とは考えず、新共和国の通常の市民と見なし、彼らに付与されていた農民共同体を基盤とする自治権と経済権を奪った。

新たな支配者となったクリオージョたちは果てしない権力闘争に明け暮れ、新国家体制は安定しなかった。スペイン軍の反攻、フランスの軍事介入、米国との戦争と相次ぐ外敵の干渉を受け、産業は育成されず、主要な経済基盤は大農園（アシエンダ）からの農牧業生産物と鉱山から採掘される鉱産物であった。これら農牧業と鉱業も相次ぐ戦乱で衰退した。疲弊した国家を立て直そうとして、社会的弱者であった農民と膨大な土地を所有していた教会に目をつけ、彼

らの犠牲のもとに国家を再建しようとした。この文脈において為政者は農民の保護者であることを放棄し、経済勢力と結託して零細農民を搾取したのである。政府がキロスの反乱で介入したことといえば、反乱者に恩赦を提案するぐらいで、農民が要求する土地所有権と労働条件の改善には真摯に取り組まなかったために「政治的で極めて社会的計画」は実施されることはなかった。植民地時代にある程度機能していた政府の調停機能という安全弁は働かず、農民は武装蜂起という道を選択するしか道は残されていなかった。

連邦政府と州政府はキロスの反乱を鎮圧した後、山岳民の自治を縮小し、政治的管理下に置こうとした。政府は新たな行政区分として軍事植民地（1849－53）、シエラゴルダ県（1849－53）、シエラゴルダ直轄地（1853－57）を相次いで設置したが、これらの新制度の早い消滅は、自治と反乱の伝統のある地域を管理強化しようとする政府の事業が頓挫したことを意味する。農民はわずかに減税されただけで、彼らの劣悪な労働状況は改善されなかった。軍事開拓村の設置で山林開発はより厳格となった。グアナフアト政府は土地の購買を奨励したが、その結果恩恵を受けたのは、アセンダド、ランチェロ等の地主階級であった。土地の払い下げは寡頭支配階級の政治的経済的権力を強化した。エレウテリオ・キロスの反乱が鎮圧された後も、シエラゴルダでは農民反乱が発生し、この地に平和が訪れるのは20世紀のメキシコ革命以降のことである。

## 注

<sup>1</sup> Katz, pp.1-589. カツを中心する研究者グループは先住民農民反乱の発生原因として4点を挙げている。①アセンダドが先住民農民から土地を強奪した。②18世紀後半から先住民人口が増加したために土地が不足した。③19世紀半ばに公布された「永代所有財産解体法」によって、農民共同体が解体され、農民が土地を失った。④富裕な白人アセンダドと貧しい先住民農民間に土地をめぐるエスニックな闘争が起こった。筆者は、公的アクター（政府）が私的アクター（アセンダド）と共同体的アクター（先住民農民）間の土地紛争を解決するための調停を怠った、あるいは私的アクターと結託したために先住民農民が反乱という道を選択せざるを得なかったと考察し、これまでメキシコの4地域の先住民反乱を調査研究した。

<sup>2</sup> Gómez Canedo, p.12



3. Lara Cisneros, p.134
4. Tutino, p.173, p.189
5. Ramírez Ortiz, p.8
6. Peña, p.28
7. Pérez Bolde, p.197
8. Reina (1988), pp.292-293
9. González Martínez, p.8
10. Cypher, p.9
11. Preciado de Alba, pp.153-154
12. 征服と植民で功績のあったスペイン人に先住民への徴税権と賦役権を与える代わりに先住民を教育し改宗させる制度。
13. Powell, p.75
14. Arroyo Mosqueda, p.76, p.83. ケレタロはオトミ族のコンニの協力によって植民化された。コンニはスペイン人に説得され改宗し、エルナンド・デ・タビアという洗礼名を授けられた。コンニはケレタロ市の創設者、植民者、知事としてその名を歴史に刻まれている。García Ugarte, pp.53-55
15. Gustin, p.53
16. Galaviz de Capdevielle, p.11
17. Gustin, p.60. ラブラ 1 世は1636年から1683年まで千名以上のホナセスを平定し、フランシスコ会の改宗を手助けした。
18. Samperio Gutiérrez, p.310
19. Galaviz de Capdevielle, p.17
20. Ibidem., pp.18-19. フランシスコ会士のオルティス・デ・ベラスコは、ラブラ 2 世がラハ・アシエンダのペオンとして働かせるためにホナセス族に教区の放棄を強要したとして告発した。ラブラは地域を平定する一方で、インディオを搾取していた。
21. Conde de Revillagigedo, p.82
22. フビペロ・セラを中心とするフランシスコ会は1750年から1768年までにシエラゴルダに5つの教区村を建設した。1767年にイエズス会が新大陸から追放されてから、セラはアルタ・カリフォルニアの布教に向かい、数々の教区村を建設し、1784年、サンカルロス・ボロメオでその生涯を閉じた。
23. Conde de Revillagigedo, p.9. カルロス 3 世の命を受けた巡察使ホセ・デ・ガルベスは、シエラゴルダの布教活動の停滞を報告するとともに1767年追放されたイエズス会の布教活動の功績を称賛している。
24. Galaviz de Capdevielle, p.29
25. Xichú, pueblo de Sierra Gorda, 1794. AHH, Leg.441-16
26. AGN, Tierra, Volumen 1373, 1806. Auto sobre tierras entre los naturales de Xichu de Indios y los de la Cieneguilla y sus colindantes de las haciendas de Charca, Palmillas y Salitre, f.43, anversos y reverso
27. AGN, Tierra, Volumen 1373, 1806. f.8, anverso y reverso
28. González Martínez, pp.54-55

29. Gómez Canedo, p.12
30. Hale, p.248
31. Reina (1988), p.275
32. AHSDN, Exp.XI/481.3/2337, Cartas del Comandante General de Querétaro, enero de 1847
33. シェラゴルダの家父長的軍人トマス・メヒアは米墨戦争に参戦し、モンテレイの防衛戦で戦った。
34. González Martínez, pp.94-95.「政治的計画」の骨子：連邦政府の否認、侵略者である米国人との戦争継続、計画反対者への武力討伐、あらゆる税金の廃止、参加者による自由な軍の編成、参集した司令官による総司令官の選出。
35. Reina (1994) p.146
36. Ibidem., pp.147-148
37. HN. El Correo Nacional, 17 de abril de 1848.
38. Calvillo, p.171
39. La Memoria del Estado de Guanajuato, pp.4-5
40. Ramírez Ortíz, p.82
41. Guerrero Tarquín, p.39
42. Ramírez Ortiz pp.150-151
43. AHESLP, Sección:Secretaría de Gobierno, Ramo: Guerra, Cartas del Inspector General de Guardia Nacional de San Luis Potosí, de los meses de enero, febrero, marzo, abril, mayo, junio y julio describiendo todos los movimientos y ataques de los serranos
44. AHSDN, XI/481.3/2855, Tomado de una serie de partes militares de marzo de 1848
45. HN. El Siglo XIX, 18 de marzo de 1849. 以前キロスらはベラステギー族のもので働いたことがあった。
46. González Martínez, pp.130-131
47. 国家警察隊は歩兵、騎兵隊、砲兵隊から成り、18歳以上の“善良な市民”によって構成される民兵組織である。戦闘中は給与が支払われたが、原則無報酬である。戦功があれば正規兵と同様に報酬、名誉、恩給が約束された。だが農民を襲い秩序を乱し、社会を荒廃させることもあった。
48. HN. El Siglo XIX, 30 de marzo de 1849
49. González Navarro, p.40
50. González Martínez, pp.73-74
51. AGN. Gobernación, tranquilidad pública, sección 2ª.1849. キロスからラモン・アダメ氏と現知事フリアン・デ・ロス・レイエスへの書簡：真の州知事は暴力的に解任されたラモン・アダメ氏である。これより州政府を承認せず、私の勝ち進む軍を阻止しようとする州政府軍を恐れない。社会的な生活改善を望むすべての不幸な3000から4000の者たちを信頼し、簡素で平等な法を獲得して、私に従う勇者の部隊を熱烈に加えることになるであろう。アダメ氏に改めて述べる。貴殿は不正義によって失った知事職を回復することになるであろう。このメモが新聞で公表されることを期待する。この闘

いは盗賊の闘争によるものではなく、政治的で極めて社会的考えを公表するものである。

52. La Memoria de gobierno del Estado del Guanajuato correspondiente al año de 1852, p.66
53. García Ugarte, pp.94-95. 16世紀半ばにコンニ（エルナンド・デ・タビア）が他界した後、彼に匹敵する軍功を残したインディオは現れなかった。王室はシエラゴルダの平定が一定の成果を収めると、インディオの軍勢力をそれほど必要としなくなったために、インディオ・カシーケの存在感は薄れた。また植民地期にインディオの有力者とスペイン人女性の通婚が行われるようになり、先住民の血統は次第に失われ、混血化が進行し、インディオとメスティーソの区別がつかなくなった。
54. Ugarte, p.204

## 参考文献

### 公文書館

AGN (Archivo General de la Nación)

AHSDN (Archivo Histórico de la Secretaría de la Defensa Nacional)

AHH (Archivo Histórico de Hacienda)

HN (Hemeroteca Nacional)

### 論文・図書

- Arroyo Mosqueda, Artemio (2002) *Apuntes para la historia colonial de la Sierra Gorda*, Revista Centro de investigación, Universidad La Salle, vol.5, núm.19, junio-diciembre, 2002, México
- Calvillo, Tomás (1994), “¿Bandidos o rebeldes?”, Samperio Gutiérrez, Héctor, *Sierra Gorda: pasado y presente*, Fondo Editorial de Querétaro
- Conde de Revillagigedo, *Informe sobre las Misiones 1793 e instrucción reservada al Marqués de Branciforte 1794*, Introducción y Nota de José Bravo Ugarte (1966), Edición Jus, México
- Cypher, James (2007), *Reconstituting community: local religion, political culture, and rebellion in Mexico's Sierra Gorda, 1846-1880*, Indiana University
- Galaviz de Capdevielle, María Elena (1971), *Descripción y pacificación de la Sierra Gorda*, Estudios de Historia Novohispana, 4
- García Ugarte, María Eugenia (2011), *Querétaro, Historia breve*, El Colegio de México
- Gómez Canedo, Lino (1988), *Sierra Gorda: un típico enclave misional en el centro de México (siglos XVII-XVIII)*, Gobierno del Estado de Querétaro
- González Martínez, Joaquín Roberto (1984), *Una sublevación campesina: El movimiento regenerador de Sierra Gorda, 1847-1849*, UAM
- González Navarro, Moisés (1977), *Anatomía del poder en México (1848-1853)*, El Colegio de México
- Guerrero Tarquín, Alfredo (1988), *Reminiscencias de un viaje a través de la Sierra*

*Gorda, por Xichú y Atarjea*, INAH

Gustin, Monique (1969), *El Barroco en la Sierra Gorda. Misiones franciscanas en el Estado de Querétaro, siglo XVIII*, INAH, México

Hale, Charles A. (1994), *El liberalismo mexicano en la época de Mora*, Siglo XXI, México

Katz, Friedrich (1988), *Riot, rebellion and revolution. Rural social conflict in Mexico*, Princeton University Press, New Jersey

Lara Cisneros, Gerardo (2009), *El cristianismo en el espejo indígena. Religiosidad en el occidente de Sierra Gorda*, CONACULTA, México

Ramírez Ortiz, Néstor Gamaliel (2012), *Pugnas y disputas por el control político-administrativo y militar de la Sierra Gorda, 1810-1857*, El Colegio de San Luis

Peña, Guillermo de la (1993), "Poder local, poder regional: perspectivas socioantropológicas", Padua, Jorge y Alain Vanneph (1993), *Poder local, Poder regional, México*, El Colegio de México

Pérez Bolde, Alfredo (1988), *Notas sobre la rebelión de Sierra Gorda, Guanajuato: evolución social y política*, El Colegio de Bajío, Guanajuato

Powell, Philip (1985), *La guerra chichimeca (1550-1600)*, FCE

Preciado de Alba, Carlos Armando (2009), "Acciones políticas y proyectos económicos en Guanajuato frente al conflicto de la Sierra Gorda 1847-1852", *Revista LiminaR*, Estudios sociales y humanísticos, año 7, vol.VII, núm.2, diciembre de 2009, Tuxtla Gutiérrez, Chiapas, México

Reina, Leticia (1988), "The Sierra Gorda Peasant Rebellion, 1847-50", Katz, Friedrich (1988), *Riot, rebellion and revolution. Rural social conflict in Mexico*, Princeton University Press

Reina, Leticia (1994), "La Rebelión campesina de Sierra Gorda (1847-1850)", Colección Cuarto de forros, *Sierra Gorda: Pasado y Presente*, Gobierno del Estado del Querétaro

Samperio Gutiérrez, Héctor (1989), *Región centro-norte: la Sierra Gorda* "Historia de la cuestión agraria mexicana Estado de Querétaro", vol.1, Juan Pablo Editor Gobierno del Estado de Querétaro

Tutino, John (2010), *De la insurrección a la revolución en México. Las bases sociales de la violencia agraria en México 1750/1940*, Editorial Era

Ugarte, Bravo (1953), *Historia de México, caracterización, política e integración social*, Editorial Jus

本稿は学術研究助成基金助成金（課題番号16K03135）と早稲田大学特定課題研究助成費（課題番号2016K-002）による成果の一部である。